

オリンピック・レガシーの概念の変遷にみる日本のオリンピック

ー第18回オリンピック東京大会の招致とその準備に着目してー

杉岡 芳樹

キーワード：オリンピック・レガシー，レガシー・キューブ，第18回オリンピック東京大会

1. 研究の動機

オリンピック・レガシー、すなわちオリンピックの遺産とは近年になって広まった概念であり、現在ではオリンピックの開催都市として立候補する際に、何を遺産として遺すのかを明記することが義務付けられている。

このオリンピック・レガシーという言葉は1964年に行われた第18回オリンピック東京大会当時には存在していなかった。それでは、その時代にどのようにオリンピック・レガシーの概念が語られてきたのか、ということを知りたいと思い、本研究を行うことにした。

2. 研究の背景

オリンピック・レガシーという概念が生まれた背景には、IOCの抱いていた危機感の払拭というテーマが存在していた。

オリンピック・レガシーを分類するためには、レガシー・キューブというものが用いられる。レガシーをポジティブかネガティブか、有形か無形か、計画的か偶発的かという三軸によって分類したものである。

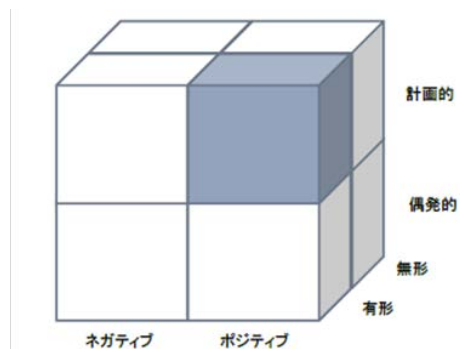


図 レガシー・キューブ

(Gratton, C, Preuss, H, 'Maximizing Olympic impacts by building up legacies', *The International Journal of the History of Sport*, 25(14), 2008, pp. 1922-1938)

IOCが「ポジティブ」で「永続的」なレガシーを強調している一方で、「主体」や「時間」によって見解が異なってしまうオリンピックの遺産も確かに存在している。そのようなものは、IOCのいうオリンピック・レガシーの理念に反している。もちろん、過去のオリンピックにおいてオリンピック・レガシーについての明確な記述はなされていない。だが、「レガシーなるもの」が遺されてきたという事実はある。しかし一方で、それらは「主体」と「時間」をずらして見ると、ポジティブにならないのかもしれない。

3. 研究の目的と意義

以上の背景を踏まえて、本研究の目的を挙げると、

①「オリンピック・レガシーなるもの」が第18回オリンピック東京大会の招致、また大会準備期においてどのように考えられ、語られてきたのかを明らかにすること

②その「オリンピック・レガシーなるもの」はどのように意味づけられ、どのような価値を持っているのかを明らかにすることの2点となる。

また、この目的を達成することによって日本のオリンピック・ムーブメントがより活発になること、オリンピック・レガシーという言葉への関心を向上させることを意義とする。

4. 先行研究の検討

オリンピック・レガシー自体の研究は近年になって増えているが、歴史的な意味づけを行なっているものは存在しない。また、オリンピックの遺産という観点から歴史的に第18回オリンピック東京大会を考察するという研究は存在するが、オリンピック・レガシーという考え方をを用いているものは存在しない。従って、本研究は有意なものである。

5. 本論

本論は3章構成である。第1章では、第12回オリンピック大会について、第2章では第18回オリンピック大会の招致過程を、第3章では第18回オリンピック大会の準備期におけるオリンピックと東京の関わりをレガシーという考え方を用いて考察していく。

5.1 第12回オリンピック東京大会の決定とその返上

1940年に行われるはずだった第12回オリンピック東京大会は、「幻のオリンピック」としても知られるように、一度招致が決まっていたが戦争によって開催が断念された大会である。この大会において東京はどのような活動をし、何を遺したのか、また何を遺そうとしたのか。

当時は戦火が広がっており、とてもオリンピックどころではないという状況であった。それでも「スポーツと政治は別物である」という考えに基づき、各界の熱意によってやっとの思いで招致を獲得したのである。その経験、特に対外政策は後々の海外諸国との関係を作るための礎となり、永続的なレガシーとなりうる。しかしその一方で、競技場建設について問題が噴出したように、すべてがオリンピックのため「だけ」かのように計画をされており、先の見通しが十分でなかった。各界から反発を受け、戦争がなくともオリンピックを開催できるのか、と危ぶまれていたのである。

5.2 オリンピックを東京へ - 第18回オリンピック大会招致活動 -

戦争が終わり、日本が国際社会への復帰を果たすようになると、1960年に行われる第17回オリンピック大会の招致への動きが生まれる。しかしこの大会の招致は、東京が抱える諸問題を解決することなく行われたことや、当時の開催地の欧州偏重の傾向を踏まえても厳しいとされていたものであった。結果として東京は惨敗し、ローマが開催地に決定した。

東京はそのまま次の第18回大会の招致も目指すこととなる。第17回大会の失敗を踏まえ、問題点を解決し、第12回大会の経験を生かして、積極的な対外政策に乗り出した。東京の知名度の低さは、第3回アジア競技大会やIOC総会の東京開催をもってIOC委員を東京に招待することで解決された。距離の問題は技術の

発達により解決し、それよりむしろ心の距離が開いていると指摘し、その距離を埋めようといった内容の平沢和重のIOC総会におけるスピーチに委員は心を打たれた。また、競技場問題は遂に解決を迎え、国立競技場が日本のシンボルとして建設された。八田一郎や和田勇といった人々の対外政策による貢献もあり、ついに東京は開催権を得ることとなるのである。東京はそれまでの経験や失敗をレガシーなるものとして引き継ぐことに成功したのである。

5.3 オリンピック大会の準備における東京都の施策

オリンピックの開催が決まっても、問題は山積みであった。大会資金の問題や政治のオリンピックへの介入、そして国内では低調なムードが漂っていた。

大会資金問題を通して、東京は大会を縮小するという考えを一切示さなかった。平和国家として既に再スタートを切ったのだということを国内外にアピールするためには、最大規模での大会開催が必要であったのだ。政治のオリンピックへの介入の際も、あくまで日本は「中立」を保ち、心の距離を埋めようと言った平沢の言葉に反しない姿勢を見せ続けたのである。

また、国内ではオリンピックに対する意識の低さが露呈したが、オリンピックは「無形の利益」をもたらすというオリンピック憲章の文言通り、人々にとってはオリンピックが何をもたらすのかということは分からなくて当然なのかもしれない。それらは偶発的なものとして人々の心に残り続けるのだろう。

6. 結論

オリンピック・レガシーという言葉がない時代においてもその概念は存在し、意図しようともせずとも、有形無形問わず、それらは生かされて、活用されてきたものであるということが示された。

オリンピック・レガシーというものの価値は、それが予め示されることにあるだろう。一般市民にとって、オリンピックが何をもたらすのかということは非常に分かり辛いものである。それらを明示することによって、そのイメージを明確にし、オリンピック熱を高めることへと繋がるのではないだろうか。

(指導教員 秋元 忍 准教授)